印度學佛教學研究第六十七巻第一号　平成三〇年十二月

法然が夢で見た高野登山

長谷川浩文

はじめに

著者は、法然（一一三三―一二一二）が高野山に籠ったこと、[1]九宗歴訪に出掛けた時期が従来言われていた法然二四歳ではなく、法然三八歳頃であること、[2]そして、法然が高野山に籠った時期は、法然二六歳から三三歳までのおよそ七年の間に絞り込めること[3]との以上三点について、それぞれ明らかにした。舜昌（一二五五―一三三五）撰『法然上人行状絵図』（以下、『四八巻伝』と略す）巻五の法然が夢で見た高野登山の話から、治承元年（一一七七）から治承三年（一一七九）までの期間に、法然が嵯峨に住していたことが明らかとなる。

一　夢で見た高野登山

『四八巻伝』巻五には、夢の話として法然が高野山に登山したことが次のように記されている。[4]

建仁二年九月十九日談議のとき上人かたりてのたまはく、（中略）又義釈には、「華厳・般若種々不思議の境界を摂す」といへるを、十住心論には唯華厳にかぎり、あやまりてその宗までを摂して、般若をば覚心不生心に摂すること、又もちて違せり。

かくのごときの義をもちて、ひそかに難勢をくはへたてまつるほどに、いまは二十余年にもやなりぬらん、源平の乱よりさき、嵯峨に住したりしころ、夢にみるやう、請用して他行したりけるそのあとに、弘法大師より「きとまいらせ給へ」とて御つかひの候つる、といふをきゝて心におもふやう、内々難じ申ことのきこへたるよな、とおもへども、さあらんにつけてもと存じて、すなはち大師のところへ参ず。

五間ばかりなる家の板敷もなくへだてもなくて、唯内によほうにぬりめぐらしたる壁の、くちもなきのみあり。大師はこのうちにおはしますとおぼゆ。まづ外にてこはづくろひをなしたれば、その壁のうちより、「こなたへ」とおほせらるゝこゑあり。その御こゑにつきて、いりてかべのうちをみれば、さらにその戸なし、かべのくづれたるところのみあり。そのくづれよりくゞりいれば、大師壁のきはにおはしまして、すなはち胸をあはせていだきあふ。大師の御

顔は予が左の肩にをき給。かくて前々難破することゞもを一々に会釈せしめ給ふ。

これをきけどもなを驚動せず、それはと申て、かさねてその義を難じたてまつらんとするとおぼしくて夢さめぬ。のちにこれを案ずるに、難じ申義、みな大師の御心にあひかなへるか。ひしといだきあひたてまつりたることは、御意にかなひたるがみゆるなるべし。げにもよく難ぜられたり、とおぼしめせばこそ、夢にもさま、、に会釈し給つらめ。

凡は後学畏べしといひて、学生はかならずしも先達ならばといふことはなきなり。かの如来滅後五百年に、五百の羅漢あつまりて婆娑論をつくれりしに、九百年に世親いで、、倶舎論をつくりてさきの義を破し給き。義の是非を論ぜんことは、あながちに上古にもおそるまじきものぞ、とぞ、おほせられける。

建仁二年（一二〇二）、法然が弟子たちに、弘法大師空海（七七四―八三五）の開いた密教について批難を述べる場面である。空海は『十住心論』の中で、インドの善無畏三蔵（六三七―七三五）の説を中国密教の祖師一行阿闍梨（六八三―七二七）が筆録した『大日経義釈』を批難した。そして、法然はこの空海の説をさらに批難する。法然自身の言葉として、「いまは二十余年にもやなりぬらん、源平の乱よりさき、嵯峨に住したりしころ、夢にみるやう」とある。「いま」とは、建仁二年九月十九日の談議を指す。

源平の乱とは、治承・寿永の乱（一一八〇―一一八五）のことであり、六年間に渡る大規模な内乱であった。「源平の乱よりさき、嵯峨に住したりしころ」とは、建仁二年より二十数年前となって、二十五年前として計算すると治承元年となり、源平の乱より前であるから、治承元年から治承三年までの期間の頃であろう。

明治三十一年に刊行された『浄土宗年譜』は、『四八巻伝』巻五から引用して次のようにまとめられている。(5)

治承四年　大師嘗テ空海ノ十住心ヲ難シ玉ヒシコトアリ此頃嵯峨ニ住シ玉フ日彼レ大師ノ夢ニ入リテ重々ニ會釋ヲ設タリ（傳五）

同様に、昭和十六年に刊行された『浄土宗大年表』にも、『四八巻伝』巻五から引用して次のようにまとめられている。(6)

治承四年　是歳（頃）　宗祖、源平の乱を避け、嵯峨に住し、夢に弘法大師を感見す。（勅修御傳五）

著者は、法然が嵯峨に住した時期を治承元年から治承三年と考えるが、『浄土宗年譜』は治承四年（一一八〇）とし、『浄土宗大年表』も『浄土宗年譜』を受けて治承四年と考えている。『浄土宗大年表』では、法然が嵯峨に住した訳を源平の乱を避けるためとしているが、これは『浄土宗年譜』が、法然の嵯峨居住時期を治承四年としたためであろう。しかしな

がら、『浄土宗年譜』にはその訳は何も記されていない。法然が嵯峨に住した時期は、「源平の乱よりさき」とある以上、『浄土宗大年表』が源平の乱を避けるために嵯峨に住したと考えるのには、無理があると思われる。法然が嵯峨に住した時期は、治承元年から治承三年と見るべきだろう。

『四八巻伝』巻五によると、「夢にみるやう」・「大師のところへ参ず」・「大師壁のきはにおはしまして」とあって、法然は高野山へ出向いて空海と出会った夢を、嵯峨に住していた頃見たとある。治承元年から治承三年というと、法然四十五歳から四十七歳に相当する。法然が夢で見た高野山の話は、夢であるため事実とはいえないが、弁長（一一六二―一二三八）は『念佛名義集』の中で、法然は「高野ノ御山ニ掻籠リ給ヒシ」[7]と述べたことと、法然が高野山清浄心院谷の曼荼羅堂に千日籠っていたという伝承[8]は事実である可能性が高い。夢の話は法然自身の言葉として記されているため、実際法然は夢を見たのであろう。法然は高野山に籠った経験があったからこそ、このような夢を見たとも考えられる。なお、他の法然伝にはこの夢の話は全く記されていない。[9]

『四巻伝』巻第一には「保元々年求法のために修行すとて、先嵯峨に参籠」[10]とあり、『増上寺本』には「後白河院御宇保元々年求法のために嵯峨栖霞寺に参籠」[11]とあり、『知恩伝』には「保元々年夏比、上人一夏間参二籠嵯峨釋迦堂一、時上人行年廿四」[12]とあるように、保元元年、法然二四歳の時嵯峨栖霞寺に参籠している。法然と嵯峨との関係は、この頃より始まったのであろう。『四八巻伝』巻四三には、嵯峨の二尊院に草庵を結んだことが記されているので次に記す。[13]

嵯峨の正信房湛空ハ　徳大寺の左大臣（割注　實能公）の孫　法眼圓實の真弟　大納言律師公全これなり（中略）菩提の直路をねかふ心さしふかゝりけれハ　つゐに聖道門をすて、　上人の弟子となりひとすちに浄土門にそいり給ける（中略）稽古を事とせす　小学の単修をこのみて学問選択集にハすくへからすとそ申されける　年たけ齢かたふくま、に　道心いよ、堅固にして　専修功つもり行徳あらハれけれは　世こそりてこれをたうとひき　毘沙門堂の法印明禅最後の知識にハ　このひとをそもちゐられける　嵯峨の二尊院ハ上人草庵をむすひてかよひ給し地なりその跡をかうはしくして居をこ、にしめ　寺院を興隆し　楞厳雲林両院の法則をうつして　廿五三昧を勤行し　上人の墳墓をたて、　もはらかの遺徳をそ戀慕し給ける

ここでいう嵯峨の二尊院の草庵とは、『四八巻伝』巻五にある「源平の乱よりさき、嵯峨に住したりしころ」の居所を指すと思われる。『四八巻伝』巻五にある嵯峨に住したりしころとは、『四巻伝』等とは別の話であって、嵯峨に二度住することがあったことになる。この点は、従来あまり注目されてこなかったが、嵯峨と高野山とは当時密接な関係があることからも著者は重要であると考える。

二　五相成身之観

『私日記』には、法然が密教の観法である五相成身之観を行ったことが記されている。[14]

修二真言教一入二道場一観二五相成身之観一行顕レ之。

五相成身とは、『岩波仏教辞典』に次のようにある。[15]

金剛頂経、すなわち初会金剛頂経たる一切如来真実摂経は、その冒頭に一切義成就菩薩が通達菩提心・修菩提心・成金剛心・証金剛身・仏身円満の五つの段階を履んで成仏し、毘盧遮那如来となるその有様を叙述する。これは、釈迦族の王子シッダールタ（悉達多）が成道して釈迦牟尼仏となった歴史的な事実に対する密教的な解釈を示すものであるが、後の金剛界系の密教においては、この成仏の体験をこの五段階において象徴主義的に模倣する行法（五相成身観）が即身成仏の方法とみなされることになった。

法然は、五相成身之観を行った上で即身成仏を試みたことであろう。『私日記』には、道場とあるが場所はおそらく嵯峨又は高野山と思われる。しかし、成し遂げることは出来なかったと思われる。『四八巻伝』巻五にある嵯峨に住したことと夢の話は、即身成仏を成し遂げることが出来なかった後のことであろう。『四八巻伝』巻五によると、嵯峨に住していたのは治承元年から治承三年の期間の頃と推定されるため、仮に高野山で即身成仏を試みたとなると、法然が高野山に籠った時期から数えて、十五年から二十年位経って、嵯峨で夢を見たことになる。

法然は、密教の根本教義である空海の即身成仏義を難じていた頃夢を見た。夢が覚めた後、自らが空海の義を難じた結果、空海の御意に叶ったからこそ空海は一々に会釈されたのだと述べている。会釈とは、異なった説を照合し、その教えの根本に立ち返って融和させ、矛盾なく説明することである。[16]空海の御意に叶ったとは、互いに認め合ったということであろう。法然が空海を認めることはあっても、空海が法然を認めることは事実としてあり得ない。ところが、当時高野山では法然の浄土思想を看過しえない状況であったようである。[17]

『大乗起信論』に対する註釈書である『釈摩訶衍論』は、真言密教の思想と一致することから、空海は自らの全著作中、いたるところでこの論によって真言教義を発揮した。[18]いま、この『釈摩訶衍論』巻第十にある「勧劣向勝不退門」を、さらに進展させた順継（一二六〇―?）著『釈摩訶衍論第十広短冊』には、善導（六一三―六八一）の著書が多く引用されている。法然は、『選択集』において「偏依善導」と述べたように、浄土門の教えは善導一師に依ったことを明らかにした。順継が、『釈摩訶衍論』巻第十にある「勧劣向勝不退

門」に関して、善導の著書を多く引用しながら『釈摩訶衍論第十広短冊』をまとめたのも、法然の影響が高野山に及んでいたからであろう。空海が法然を認めた訳も、この辺りにありそうである。

法然が夢で見た高野登山の話のポイントは、自らが空海の義を難じた結果、空海の御意に叶ったため空海は一々に会釈したことである。言い換えれば、法然が空海の義を難じた結果、当時の高野山の密教僧たちは非を認め、法然の浄土思想を密教的に解釈する必要に迫られたと言えよう。『四八巻伝』の撰者舜昌は、この点が最重要であって、法然が実際高野山に籠った話はさほど重要でもないため、事実として記さなかったと思われる。

おわりに

法然は嵯峨又は高野山に籠り、即身成仏を試みたが成し遂げることが出来ず、その後、『四八巻伝』巻五にある夢を見たのであろう。『四八巻伝』巻五から、治承元年から治承三年までの期間に法然が嵯峨に住していたことが新たに明らかとなった。『浄土宗年譜』および『浄土宗大年表』に記された治承四年は誤りである。嵯峨と高野山とは、当時密接な関係にあったと思われるため、法然も嵯峨を経由して高野山へ向かったものと考えられる。

1 長谷川二〇一四。
2 長谷川二〇一六。
3 長谷川二〇一七。
4 『四八巻伝』巻五（大橋俊雄校注『法然上人絵伝』（上）、岩波書店、二〇〇二、四一頁）。
5 越智一八九八。
6 藤本一九九四。
7 『念佛名義集』巻上（『浄土宗全書』第一〇巻、三六八頁）。
8 『紀伊続風土記』（『続真言宗全書』第三六、三七〇頁）。
9 法然上人傳研究会一九六一。
10 『四巻伝』巻第一（『浄土宗全書』第一七巻、五八頁）。
11 『増上寺本』（『浄土宗全書』第一七巻、九二頁）。
12 『知恩伝』（『法然上人傳全集』七四四頁）。
13 『四八巻伝』巻四三（前掲『法然上人絵伝』（下）、一九三頁）。
14 『私日記』（『浄土宗全書』第一七巻、八五頁）。
15 中村他二〇〇〇。
16 中村他二〇〇〇。
17 北川二〇〇九。
18 小野一九九九。

〈参考文献〉

長谷川浩文「高野山に籠った法然」『印度学仏教学研究』第六三巻第一号、二〇一四
長谷川浩文「法然の九宗歴訪時期」『印度学仏教学研究』第六四

巻第二号、二〇一六
長谷川浩文「法然の高野山籠時期」『印度学仏教学研究』第六六巻第一号、二〇一七
越智専明編『浄土宗年譜』教報社、一八九八
藤本了泰『浄土宗大年表』山喜房仏書林、一九九四修訂
法然上人傳研究会『法然上人傳の成立史的研究』第二巻、臨川書店、一九六一
中村元他編『岩波仏教辞典』岩波書店、二〇〇〇
北川真寛「東密における三密行について――論義とその背景としての浄土思想を含めて――」『日本仏教総合研究』第七号、二〇〇九
小野玄妙等編『仏書解説大辞典』縮刷版、大東出版社、一九九九

〈キーワード〉 法然、高野山、『四八巻伝』、五相成身

（浄土宗西山深草派宗学院助手）

新刊紹介

川添泰信　編

親鸞と浄土仏教の基礎的研究
（六角会館研究シリーズ　8）

A五版・四四四頁・本体価格七、二〇〇円
永田文昌堂・二〇一七年十二月